

説教 『 あなたが聖霊で満たされるように 』

小河信一 牧師

使徒言行録 9章 1節～19節

使徒言行録 9:1-2——

¹ さて、サウロ（パウロ）はなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、² ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。

ダマスコのキリスト者を迫害しようとしていたパウロが、ダマスコのキリスト者の一員になった——この奇しき出来事は、まさに神の計画であり、またその成就にほかなりません。

この奇しき出来事について、G.シュテーリンは次のような疑問を投げかけています。

なぜパウロがまさにダマスコを選んだのか、彼は同じ目的ですでにどこか他所^{よそ}へ行ったのか、他にも迫害する者たちが他の地域へ出かけたのか、これは私たちには知らされていない。

パウロのダマスコ派遣に関し、聖書、すなわち、創世記をはじめとするモーセ五書を熟知していたパウロ（使徒 22:3、フィリピ 3:5）及び大祭司がひょっとしたら思い起こしていたかもしれない成功譚^{たん}（物語）があります。

創世記14:10-12 王たちの戦い——

¹⁰ シディムの谷には至るところに天然アスファルトの穴があった。ソドムとゴモラの王は逃げるとき、その穴に落ちた。残りの王は山へ逃れた。¹¹ ソドムとゴモラの財産や食糧はすべて奪い去られ、¹² ソドムに住んでいたアブラムの甥ロトも、財産もろとも連れ去られた。

同 上 14:13-16 ロトの救出——

¹³ 逃げ延びた一人の男がヘブライ人アブラム（アブラハム）のもとに来て、そのことを知らせた。アブラムは当時、アモリ人マムレの檜の木の傍らに住んでいた。マムレはエシュコルとアネルの兄弟で、彼らはアブラムと同盟を結んでいた。¹⁴ アブラムは、親族

の者が捕虜になったと聞いて、彼の家で生まれた奴隷で、訓練を受けた者三百十八人を召集し、ダンまで追跡した。¹⁵ 夜、彼と僕たちは分かれて敵を襲い、ダマスコの北のホバまで追跡した。¹⁶ アブラムはすべての財産を取り返し、親族のロトとその財産、女たちやそのほかの人々も取り戻した。

アブラハムの甥^{おい}ロトは、大国同士の戦乱に巻き込まれ、捕虜になりました。そこで、アブラハムは、「訓練を受けた者」、318人を引き連れて、「ダマスコの北のホバまで追跡し」、無事ロトを保護しました。

多勢に無勢、アブラハムは、東の王たちの大軍に挑みました。ただただそれが神の救いの計画であるゆえに、アブラハムは異邦人のただ中、敵地で、イスラエルの同胞、甥ロトを救出することができました。地の果て・領外であるダマスコ近郊で、神の勝利が輝きました。

神の律法により「訓練を受けた者」、パウロ（サウロ）もまた、イスラエルの同胞、つまり、ユダヤ人キリスト者を奪還すべくダマスコを目指しました（出発の拠点もアブラハム・ヘブロン〔マムレ〕とパウロ・エルサレムで隣接しており、ダマスコまで300km弱の遠征です）。大祭司のお墨付きをもらったパウロの鼻息はいやが上にも荒くなったことでしょう。

パウロの場合、厳密には、「主（キリスト）の弟子たち」を救出するというよりも、懲罰することが目的でした。キリスト者を絶滅することが企てられたのです。他方、先行するアブラハムのダマスコ進軍の場合、保護された甥ロトは、ソドムの滅亡（創世記19:24-25）の後も生き延びました。そして、ロトはモアブ人とアンモン人の祖先となりました（創世記19:30-38）。神により訓練された者が用いられた救出劇は、将来にわたる大成功でした。

今、二人の人物、アブラハムとパウロのダマスコ近郊の奇しき出来事を静かに顧みてみましょう。

そこで教えられることは、同胞・隣人を救出しようとする人の善意であれ、あるいは、同胞・隣人を懲罰しようとする人の悪意（パウロはそれを善意と勘違いした！）であれ、神の計画は揺るぐことなく、最後には、神が勝利するという事ではないでしょうか。その際、神はご自身の計画・実行・成就のうちに、御言葉により「訓練を受けた者」を用い、「主（キリスト）の弟子たち」を増し加えられていきます。

もし仮に、パウロがダマスコ近郊で大勝利を収めたアブラハムのように勝利したいと望んだとしても、人を一人ひとり導かれる神の計画に従って、パウロは「アブラハムのように」ではなく、「パウロのように」（彼自身の上にある独自の神の導きにより）、神の勝利へと導かれたのです。そこに、サウロとして神の前に敗北し、悔い改めをもって主イエス・キリストの救いにあずかり、パウロとして立ち上がる「この道」（使徒9:2、22:4）が彼の前途に開かれました。

旧新約の双方において、ダマスコ近郊で神の光が人々を照らし出し、神の勝利をもたらすという点で、神の御心の揺るぎないことが証明されました。そして、パウロのダマスコ近郊及びその町での出来事においては、「天からの光」、「呼びかける声」、「洗礼」などを通じ、主イエス・キリストの救いが啓示されたことによって、キリストにある新しい勝利が輝きました。神の前に、大祭司の前に、「自分の」勝利を乞い願っていたパウロが、ほんとうの神の勝利にあずかりました。それは、まさに「目からうろこ」（使徒9:18）の新しい神の栄光でした。

ユダヤ民族史上に輝く先例としてすでに起こり、旧約の時代から預言されていた、ダマスコ近郊及びその町における一人の人物に現された神の勝利は、キリスト教の成長と伝道の転換点となりました。都エルサレムではなく、地の果て・領外で起こったということも、ユダヤ人伝道から異邦人伝道へと伸展を図られる神の計画だった言えましょう。

共通の「ダマスコ体験」を持つアブラムとサウロ——神との契約によって二人がまことの信仰者となった時（創世記17:4-5、使徒13:9）、アブラムはアブラハムに、また、サウロはパウロに名前が改められました。

少し前置きが長くなりましたが、つづさにパウロ（サウロ）の回心の場面を見てみましょう。

使徒言行録 9:3-6——

³ ところが、サウロ（パウロ）が旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。⁴ サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。⁵ 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。⁶ 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

^{こぶし}拳を振り上げるかのように、意気込んでいたパウロを、^{いちげき}上からの力が一撃しました。それによって、パウロは地に打ち倒されました。

これはまず、私たちの注目すべき点ですが、神からの力または愛が先行しているということが物語られています。回心、すなわち、心の方向転換は、私たちが舵を切ったのではなく、神がその場その時を整えられて、起こされるものであるということです（参照：マタイ18:3「心の向きを変えられて〈受身!〉子どもようになる」）。

突然の「天からの光」によって、パウロはひっくり返されてしまいました。神の力が、パ

ウロの前へ急ごうとする力を圧倒しました。自分では説明し難いことかもしれませんが、信仰者である私たちもそれぞれこのような神の力によって捉えられ、教会に導かれたのではないのでしょうか。

以前、パウロの心はダマスコでキリスト者を迫害することによって占められていたでしょうが、今や、パウロは「起きて町に入れ」との主の命令に従って、ダマスコ「教会」（その町の家教会または信徒の交わり）へ通う者……ダマスコ教会の教会員……となりました。三日間……主イエスの十字架から復活への道を象徴する……の内に、主キリストとその奉仕者たちによって、パウロがキリスト者と交わる準備がなされました。

まばゆいばかりの「天からの光」と共に、パウロを回心へと導いたのは、神の言葉、主キリストの呼びかけでした。それは、光とは別のかたちで、私たちにとって明瞭に、私たちの心の板に刻み込まれるものです（Ⅱコリント3:3、ヘブライ8:10）。

呼びかけに耳を傾けたパウロに、主は、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えられました。それは、主イエスが「わたしは世の光である」（ヨハネ8:12）と、弟子たちに宣言されたように、神の顕現・臨在を証しするものでした。目が見えないという暗闇の中で、パウロは主イエス・キリストの言葉によって手引きされました。

その声は、告発（使徒9:4,5）から任命（同上9:6,15-16）へと変わる。

W.H.ウィリモン

「あなたには、わたし（神）の授けるあなた独得の使命がある」——神の言葉に^{ほく}牧され慰められる小羊・信仰者のように、神の律法厳守のためにむしろ硬直していたパウロの心は次第に^{やわ}和らげられていきました。そうして、パウロは回心すると同時に、神からの召命を受け止めました。パウロの渴いた心は、神からの大なる使命によって満たされました。

使徒言行録 9:15-16——

¹⁵ すると、主は（アナニアに）言われた。「行け。あの者（パウロ）は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。¹⁶ わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」

神の言葉の伝達者として、パウロに対して^{おく}臆するところのあったアナニアが用いられました。キリスト者の思いを超えて、伝道がなされ、思いがけない人が集って、ダマスコの礼拝共同体・教会が形成されていきました。

主イエスによって、「あなた（パウロ）のなすべきこと」（使徒9:6）は、「苦しまなく

てはならない」ことであると説き明かされました。ここには、主イエスの十字架を信じ、自分の十字架を背負うことが、まさに主の栄光のうちに引き上げられることであるという信仰の奥義が示されています。

確かに私たちにとって重い使命ですが、私たちのあらゆる苦しみの中に、共に苦しんでくださるキリストがおられます。それが、私たちの唯一の慰めです。

使徒言行録2:4——

すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。

主イエス・キリストが復活した後、50日目に、都エルサレムで聖霊降臨の出来事が起こりました。それを、「天下のあらゆる国」（使徒2:5）から帰って来た人々が目撃し体験しました。それは、その10日前に、皆の前で天に昇られた主イエス・キリストの御業、十字架と復活を、聖霊の力によって「信じる」という信仰の核になる出来事でした。

使徒言行録9:17——

そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、（あなたが）聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」

エルサレムという〈中心〉にいなかったパウロもまた、〈領外〉のダマスコで、信仰によって主イエス・キリストに出会いました。そして、パウロの信仰が、〈領外〉の地中海世界を巡る旅路において十全に保たれ続けるように、聖霊の満たしが与えられたのです。